【主題】人との触れ合いがもたらすもの
【副題】０歳児のコミュニケーションの取り方

【クラス名】　くりおね組(0 歳児)

１．主題設定理由(目的)

　親から離れ、保育園という新たな社会に踏み出した子どもたち。初めての環境で様々な人と関わっていくなかでどのように成長していくのか、また言葉でのコミュニケーションをとれない０歳児の子どもたちがどのように対人関係を構築していくのかを探りたくこのテーマを設定した。

２．研究内容(実践)

《　実践内容①　》　保育者との関わり

　４月の入園当初は、初めての環境、初めての人に慣れずに泣くことが多かった為、安心感や信頼感を得られるように抱っこやおんぶをする機会を多く取り入れた。まだ月齢も低く睡眠や空腹具合で機嫌が悪くなる子どもも多かったため、保護者に家庭での様子を聞きながら可能な範囲で一人ひとりにあった対応をするよう心掛けた。一番月齢の低い７か月のＡくん、まだ人見知りも始まっておらず初めての環境にもすぐに慣れることができた。一方で最年長の１１カ月のＲくんは、人見知りや場所見知りが始まっていたため泣いて過ごす日々が続いた。保護者に好きな遊びなどを聞き、音楽や玩具で興味をひいてみたがなかなか泣き止まなかった。食べることが好きだったため、おやつや給食の時間に保育者のヒザに座って食べることをきっかけに、保育者に徐々に心を開き、安心して自分の好きな物や遊びを見つけて楽しめる時間が増えた。声掛けや表情、おんぶや抱っこといった直接的な肌の触れ合いが子どもたちの安心感や信頼感を得る近道だと感じた。また保育室にいるよりも、おんぶや抱っこで戸外へ出た方が様々な物や音で溢れているからか、泣くことよりも興味が勝り、ピタッと泣きやむ子どもが多かった。

　月齢が上がるとともに環境や保育者に慣れていくと、抱っこやおんぶで過ごす時間は減り、好きな玩具や絵本、手遊びなどに興味を示すようになった。保育者の真似をして歌に合わせて体を揺らしてみたり、絵本を見て『いないいないばあ』をしてみたり、様々なことを吸収していった。言葉に興味が出てくると、保育者と一緒にお友だちの登園時に「〇〇ちゃん、おはよ」と挨拶をしたり、「〇〇だよねぇ」と語尾を真似てみた

りと日常の些細な言葉にも耳を傾け、学んでいることがわかった。

４月１０日　抱っこで外に出て、気分転換をする様子

４月１９日　愛着を深めている様子

《　実践内容②　》　英語の先生との関わり

　５月から週に１回１０分間ラフィー先生によるＥＣ

Ｔの活動を行った。

春の頃は人見知りをして泣いたり、午前中に寝たりする子もいたため、クラス全体が落ち着いて活動に参加できるようになったのは秋頃からだった。

初めて聞く英語の言葉や音楽に不思議そうな表情をしていた子どもたちも、３月にはすっかりラフィー先生に対して人見知りはなくなり、ヒザに座ったり、自らタッチと手をのばしたりする姿が見られるようになった。子どもたちが座って集まる位置も信頼関係が築かれていくとともに、距離が近くなっていった。また、活動中も積極的に体を動かし、「はぴ（ハッピー）」「さに（サニー）」と言葉を真似して言えるようになった。

５月２９日　緊張気味の子どもたちの様子

３月１２日　ラフィー先生が保育室に入ってきて
大喜びの子どもたち

《　実践内容③　》　他児との関わり

４月の頃は、保育者との関わりがメインで他児への興味関心はほとんどなかった。しかし、一人の子どもが泣き始めると周りの子どもたちも不安や悲しい気持ちが伝わり、つられ泣きをする子が多かった。月齢が高くなると共につられ泣きをすることはほとんどなくなり、他児の笑顔や笑い声に対して興味関心を示すようになった。

低月齢の子どもは、慣れない環境下では笑顔や楽しいというポジティブな感情よりも不安や悲しみといったネガティブな感情の方が同調しやすいように感じた。

４月１５日　玩具に興味を示していたが、
他児の泣き声を聞いて不安になり、つられ泣きする
様子

成長するとともに表情を読み取る力や言葉の理解力がつき【　笑顔や笑い声＝楽しいこと＝自分もやってみたい　】という感情が芽生えることが分かった。自分もやってみたいという気持ちは芽生えたが、その一方で他児への思いやりや譲り合う気持ち、言葉でのコミュニケーションが難しいため、トラブルになってしまうことも多かった。また視野が狭く、周りを見渡すことができないので同じ物が複数個あっても他児の使

っている玩具を欲しがる傾向があった。保育者が仲介することで、トラブルを回避することができた。

３学期になると友だちへの興味が高まり、他児を名前で呼べる子どもが増えた。お友だちの名前を呼んで指をさすという手遊びを取り入れるとあっという間に、ほとんどの子どもが他児を指さして答えられるようになった。また、遊んでいる最中に子ども同士で笑い合うことが増えた。R君がおままごとのフライパンにボールを乗せて運んでいると、それをみていた子どもたちが同じことをしながら追いかけて笑い合ったり、坂道マットで車を走らせてみたりと、子ども自身が考えた遊びを真似し、楽しい気持ちを共感していた。

子どもだけで何かを作り上げたりごっこ遊びをしたりすることは難しかったが、保育者が仲介に入ることで「やだ」や「かして」など自分の気持ちを言葉で伝えることを覚えたり、保育者の真似をして子ども同士がジェスチャーで誘い合ったりして、一緒の遊びを楽しめるようになった。

１２月１０日　「ねこちゃんお腹減っているみたい」と一人の子どもに声をかけると、みんなが集まってぬいぐるみにご飯を食べさせ始めた様子

《　実践内容④　》　異年齢児との関わり

クラスの中に兄や姉がいる子どもが多かったことから、４月から以上児の子どもたちが部屋に遊びに来てくれることが多かった。兄や姉が来てくれることでその子どもは、慣れない環境下でもいつも一緒にいる家族がいるため安心感を抱き、笑顔で過ごしていた。しかし、兄弟がいない一人っ子の子どもたちは明らかに自分や保育者とは異なる相手に不安を感じるのか、距離を置き、保育者のそばに来て様子をうかがう姿が見られた。なかなか自分から近付くことはできなかったが、お兄さん・お姉さんたちの方から声をかけてもらったり、玩具を渡してもらったりと上手く関わってもらう中で、徐々に心を開き、夏頃にはくりおね組の子どもたちの方から出迎えに行くようになった。一緒に過ごすうちに年上の優しさに気付き、他児と遊ぶ楽しさや玩具の使い方、コミュニケーションの取り方といった生きる力を学ぶことができた。

４月１９日　お兄ちゃんが遊びに来て
リラックスした表情で遊んでいる様子

１２月４日　手を繋いでもらって嬉しそうな
くりおね組の子どもたち

秋から冬にかけ、子どもたちの歩行が安定して体が活発に動くようになると、座っていることよりも歩くことが何よりも楽しいようで朝の会の時間も席を立ち上がることが増えた。保育者が「座って見ようね。」「怪我をするから危ないよ。」と声をかけてもあまり効果が

見られなかった。そのため、普段から行動を真似している憧れの年長の子どもたちが朝の会に来てくれたらどうなるのか気になり、手本を見せに来てもらった。効果は抜群で年長の子どもたちが来ると普段立って動き回っていた子どもたちも【　今は座る時間　】ということを理解したのか、落ち着いて座ることができた。

保育者が言葉で伝えることも大切だが、時には大好きで憧れている年上の姿を見て学ぶ方がルールを身につける上で効果的なことが分かった。

１月２２日　朝の会に年長児が参加している様子

３．実践結果・考察

今回の実践結果から人との関わりが何よりも子どもたちの成長・発達に繋がることが分かった。初めての環境下ではどのような活動を行うかではなく、まずは子どもたちが安心し、落ち着いて過ごせる環境を作るための援助が大切だと感じた。信頼・安心できる環境があるからこそ、子どもたちは様々なことを学び、吸収することができていた。また、家庭ではなかなか体験することができない、他者との関わりの中で子どもたちは見て、触って、聞いてと五感を使って日々学んでいくのだと感じた。

言葉を話せるようになると、【　コミュニケーション＝話すこと　】と考えがちだが、０歳児の子どもたちを見ていると、目の動きや表情、手だけではなく体を使った動作などと言葉以外での表現で自分の気持ちを伝えていた。子どもたちと関わる時に保育者自身も言葉だけに頼るのではなく、体全体を使って子どもたちに伝えていくことを大切にしていきたい。